

息の長い支援と、 災害の教訓を生かすために

レスキューストックヤードは、被災地支援に取り組むNPO法人です。活動のきっかけは、1995年の阪神・淡路大震災でした。当時、私は名古屋の大学職員でしたが、社会福祉を学ぶ学生たちが、現地で支援活動をしたいと申し出たのです。私が大学や現地との窓口となり、支援活動に取り組みました。そのときの活動をきっかけに、ボランティアネットワークを立ち上げました。息の長い支援と、災害の教訓を生かす活動が目的で、現在のNPO法人の前身です。

2000年の東海豪雨では「愛知・名古屋水害ボランティア本部」という、行政間のワク、官民のワクを越えた窓口を立ち上げ、私が本部長を務めました。そうやって災害に関われば関わるほど、ボランティアが自分の生き方の問題になってきました。しかもその時期、東海・東南海地震の震源域見直しも行われた。もう仕事どころじゃなくなり、自分は何をすべきか考えました。家族とも相談し、大学を辞め、災害支援に専念することにしたのです。

希望の芽を現地に残したい

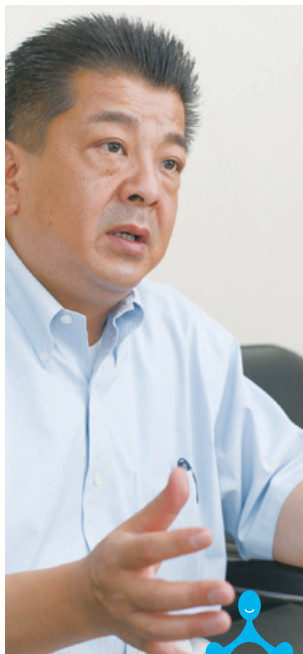
東日本大震災は、想定外としか言いようがない。広域で、福島原発まで絡んでくる。防災上の問題点や支援のあり方など、とてもひとくりに語れません。今は「足湯プロジェクト」という取り組みなどで、被災者の話を聞くことを大切にしています。現地の役場がパンク状態なので、われわれがどんどん入って、情報収集や提案も行っていきます。

現地の中学生と一緒に、仮設住宅の表札づくりもやっています。壊れた家のコンクリートから



現地の中学生と、仮設住宅の表札づくりに取り組む。

もう「想定外」は許されない 災害に強い名古屋へ 地盤や歴史から学び直そう



NPO法人レスキューストックヤード
代表理事
栗田暢之さん

くりた のぶゆき／1964年生まれ。名古屋市中川区在住。名古屋大学大学院環境学研究科修了。多くの被災地支援に取り組み、国・県・市の災害ボランティア等に関する委員会委員も歴任。現在「東日本大震災支援全国ネットワーク」代表世話人、「震災がつなぐ全国ネットワーク」代表。

板をはがし、きれいな表札をつくり、取り付けもやる。地元の人に喜んでいただけ、参加した中学生も感謝しています。こういうきずなを大切にしたいし、この中学生たちが、やがて復興で大きな役割を担ってくれるかも知れない。われわれの活動が、現地に希望の芽を残すことになってくれればと願っています。

名古屋のまちづくり、利点と課題

東海・東南海地震では、もう「想定外」は許されません。大切なことは、大地震は必ず来るということ。それを前提にした準備が必要です。そのために名古屋の地盤や歴史をしっかりと学び直すことから始める必要があります。名古屋のまちづくりに先見の明があると思うのは、道づくりを重視してきたこと。広い道路は緊急時の車の通行を助け、防災や災害救助に役立ちます。

しかし人口が膨大になり、地盤が安全とは言えないところにも人が住むようになったことは問題です。名古屋のもともとの地形や開発の歴史を伝える上で、名古屋都市センターの役割は重要です。われわれも地域に入って、そういうことを伝えていきたいし、学校でも子どもたちに教えてほしい。

災害時に大都市が担う役割

「鳥の目」「虫の目」という言葉がありますが、災害救助の面で名古屋を鳥の目で見ると、果たして東海のセンターとして機能し得るか、という問題もあります。東海・東南海地震が起きれば、大都市名古屋が東海の拠点になります。例えば支援物資は名古屋に集まってきます。それを東海各地に行き渡らせる態勢ができていくかどうか。東日本大震災では、物資が仙台に集まっています。しかしそこから各地に配れない。道路が寸断され、行政機能がマヒし、ガソリンもない。東海のセンターとしての名古屋の役割にも目を向けるべきです。

虫の目で見て大切なのは、コミュニティの役割です。いざというとき、お互い助け合うようなコミュニティをどうつくるかということです。これはわれわれの今後の課題でもあります。

レスキューストックヤードのHP
<http://www.rsy-nagoya.com/rsy/>